

題名：見えない思いやり

祖父の実家は宮城県の観光地で土産品店を営んでいます。あれは去年の夏休みのことでした。ちょっと大人になったような気分で私は祖父と一緒にお店番をしていました。すると、駅の方から、リュックサックを背負った集団が、こちらに向かってゆっくりゆっくりと歩いてきました。「登山みたいな恰好だけど、お土産を買ってくれるお客さんかな。」私はそう思いました。するとその団体さんはゆっくり近づいてきて、お店に入ってきました。私はその時かなり緊張していたのを覚えています。なぜなら、その人たちは障がいのある方たちだったからです。

私は祖父の顔を見上げました。でも祖父はいつもと変わらない笑顔で「いらっしゃいませ」と言っていました。私はずっとドキドキしていました。団体さんの中には、付き添いの先生のような人がいて、「おこづかいの額は決まっているんだから、何が欲しいかはよく考えてお買い物をするのよ。」と言いました。生徒と思われるようなその人達は「はい」と返事をして、お店をゆっくり歩き、品物を手に取ったりしていました。どのくらい時間がたったのかわかりませんが、私にとってはとても長い時間を感じました。やっと買う物が決まった人から、祖父のところにきました。が、なかなか品物も上手に渡せません。やっと渡したと思ったら、今度はお財布を取り出すのにもとても時間がかかっています。そしてせっかく出したお金も落としたりしています。その過程は先生たちも見えていたのですが、全然手伝おうとしませんでした。私の口から「拾ってあげる」という言葉が自然にでました。すると、先生と祖父が二人同時に「大丈夫。」と言ったのです。私がびっくりして顔をあげると、先生と祖父は笑顔になって、今度は一人一人話しはじめました。先生は「時間がかかるかもしれないけど、できるのよ。見ててね。ありがとうね。」と話し、祖父は「毎年お土産を買いにきてくれるんだよ。お得意さんなんだよ。」と言いました。私は自分が発した言葉のことをなんだか恥ずかしいと思いながら、それでもその場から動かず、その後の生徒さんたちと祖父のやりとりを、ちょっぴりお手伝いをしながら見ていました。そして、最後の人が買い物を終えるまで、一時間以上かかったと思いますが、全員が終わると「ありがとうございました。」「おじさん、またね。」とみんなそれぞれ挨拶をして帰って行きました。そして先生が最後に「今年もお世話になりました。来年もまた来ます。宜しく願います。」と言って、みんなを追いかけて行きました。

私が黙っていると、祖父がどこからか手紙を出してきました。一番最初にお店にあの方たちが来て買い物をし、帰ってしばらくしてからとどいた手紙だそうです。そこには長い文章はありませんでしたが、「ありがとう」の文字がたくさん書いてありました。そして、先生たちからのメッセージと、一緒には来なかったけれども、生徒さんたちの保護者の方たちからのお礼の言葉がいっぱい書かれていました。祖父は「手伝うことだけが、助ける

ことじゃないんだよ。」と言いました。「自分が何かをするのは、困っているとか、助けて欲しいとか、そういう信号を送ってくれた時でも遅くないかもしれないね。」と言いました。そして大事そうにまた手紙をしまったのです。

その日の夜、私はなかなか眠れませんでした。もしあの時私がお金を拾ってしまっていたら、もしその後、お財布からお金をだしたり、お買い物の手伝いをしていたら、あの人たちは、自分でやり遂げたという達成感がなかったかもしれません。私はあの時「拾ってあげる」と言いました。「〇〇してあげる」その言葉ははたして平等な立場の人に使うものでしょうか。

人権とは、「自分自身を含めたすべての人が、生まれながらに持っている幸せに生きる権利」のことだそうです。自分自身が幸せになる権利でもありますが、同じように他の人も幸せになる権利があるということです。私は自分だけの勝手な考えで、相手の人を勝手にかわいそうな立場と思い、その人たちが幸せになる権利を一瞬奪うところだったのではないのでしょうか。

世の中には一人として同じ人はいません。違っていて当たり前。むしろ違うことが個性といわれています。これからはそのことを常に心にとめて生きていこうと思います。そして、今年に行けなかった祖父の家にも、高校生になったら必ず行き、できればまたあの方たちがくる時期にあわせてお店のお手伝いをしたいと思います。そして今度こそ、私も何も変わらない笑顔で言うのです。「いらっしやいませ。」と。